

グルマーイの言葉についての瞑想

マハーシヴァトリー

イーシャ・サーデサイ

「求めよ、さらば与えられん」

グルマーイは、「ダルシャンを予約する」ことを願う7歳の子どもの話をした後、この話は何を表しているかについても一つの教えを与えました。

グルマーイは言いました。「求めよ、さらば与えられん。私たちは皆、これを知っています。それはあらゆる伝統に存在します。ヒンドゥー教の伝統、キリスト教の伝統、ユダヤ教の伝統、イスラム教の伝統にもあります。あらゆる伝統、あらゆる宗教において、真理は同じです」

グルマーイがこう言った時、私のマインドの中で光がともったかのようにでした。この古来の英知が再び新しくなったようでした。「求めよ、さらば与えられん」というこの言葉が由来する聖書の箇所についてはおおむね知っていました。シヴァ神について読んだ物語や教典の中にもこのテーマを確かに見てきました。そして、自分で学んだことや他の人々との会話から、イスラム教やユダヤ教の教典にも同様の考え方が反映されていることを知っていました。しかし、グルマーイがサツァングでこのことについて語るまで、私は世界のあらゆる主要な宗教的、精神的伝統に見られるこの原理、このテーマの重要性を、立ち止まって認識してはいませんでした。

どの伝統に従うことを選ぶにせよ、自らの努力が極めて重要だと考えられているという事実から、私たちは何を読み取ることができるのでしょうか？ ヘブライ語聖書、キリスト教聖書、コーラン、そしてインドの数え切れないほどの教典はすべて、神の慈悲をたたえています。しかし同時に、探究者が神へと向かう最初の一步を踏み出さなければならないことも明確にしています。探究者は、自分が何を望んでいるかを明確に表さなければならないのです。

シッダ・ヨーガの道において、グルマリーは祈りの力——神に語り掛け、神に懇願し、神と対話し親しく交わるという、奥深く神聖な行為——について幅広く教えてきました。祈りはそれ自体が一つの修行であり、マインドの知性と心の生来の知識を融合させるものです。祈ることには多くの要素が関わってきます。ただ神の前にひれ伏して、あとは神が何とかしてくれると願うだけでは不十分です。また、私たちが「正しい」と思うこと、魅力的に聞こえること、あるいは神が聞きたがっているだろうと推測した言葉を言うことでもありません。

真の祈りとは、私たち自身の魂を、至高の魂、つまり私たちの周囲で脈打っている魂と融合させることです。そしてそのためには、まず耳を澄ませなければなりません。例えば、子どもたちの足音や、窓を鳴らす風の音に。コンピューターのキーボードをたたく規則的な音や、熱したコンロの上でスープがゴボゴボと立てる音に。私たちが探し求めている脈動は、あらゆる音の中に埋め込まれています——私たちが日常的だと考える音にも、神聖なる波動そのものだと捉える音にも。

とはいえ、個人の好みも考慮に入りたいものです。私たちの身体はそれぞれ異なります。神経系もそれぞれ感受性が異なります。心地よい音もあれば、神経を逆なでする音もあります。私は、自分がどんな音を好むかを理解し、自分が不快に感じると分かっている音への接触を制限することは有益であるばかりか——極めて重要であると——気づいています。自分の身体が何を好み、何が嫌いかを知らなければ、どうやってこの身体を使って神を体験できるでしょうか？ 逆に、もし私たち自身でこのプロセスに取り組み、自分が何を好み、何が自分にとって良いかを理解すれば、神聖なる者に触れるという驚くべき可能性を自らに与えることができるということです。

究極的には、この世界の静寂から現れた音はただ一つであり、その音こそが、風や波、そして私たちの心臓の鼓動の中で反響しています。オーム、原初の音。この音に耳を澄ませ、言葉を用いてそれを声に表す時、私たちの祈りはオームのエネルギーに満たされます。祈りはオームの力を宿すのです。

私たちが祈る時、この場所から「いつも」来ているとは限らないことは、私も認識しています。時には絶望や恐れ、あるいは罪悪感から祈ることもあります。時には何かを本当に欲して祈ることもあります。このことで自分を責める必要はありません。そもそも祈るきっかけとなった不安を、さらに罪悪感で増幅させる必要がないことは確かです。以前書いたように、私たちの祈りはいつでも聞き届けられます。シヴァ神が、恩恵を与える者、ヴァラダと呼ばれるのには理由があります。幸福を与える者、シャムブ、慈悲の宝庫、カルナーニディと呼ばれるのには理由があります。

しかし、グルマリーの教えから私が理解したのは、祈りはそれ以上のものになり得るということです。単なる願望の実現以上のものになり得るのです。祈りは神の体験への入り口となり得ます。そしてその体験から生じる言葉は、神の意志と一致するのです。私のマインドが向いたのは、2026年のグルマリーのメッセージと特にその2行目、「順守する！ ダルマに従いなさい」です。Observe（順守する、観察する）がダルマに従うことの前兆であること——私たちのダルマとは何かを確認し、それを果たすためには、（自分自身、他者、世界に対する）ある程度の気づきがまず必要であることは、とても魅力的だと感じます。

最近、私はシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムで、友人と祈りについての話を交わしていました。そこで私たちは、祈るためにテンプルのバガヴァーン・ニッティヤーナンダの面前に来た時に、似た体験をしていたことに気づきました。私たちは事前に何を願いたいのかを「真剣に」考えます。願いを表現する「完璧な」言葉を見つけます。その時が来たらすぐ思い出せるように、言いたい言葉を暗記したことさえあるかもしれません。しかし、いざバデ・バーバの前に来た時——その黄金の姿を見上げ、慈悲深いまなざしが注がれた時——あれほど念入りに練習した言葉が出てこないのです。代わりに、「別の」言葉——私たちを驚かせる言葉、しかし恐らく私たちが実際に切望しているものをより正確に伝える言葉——が浮かんでくるのです。

こんなことが私に何度も起こるので、思わず笑ってしまいます。同時に、それは祈りへの取り組み方をもっと洗練させたいと私に思わせます。自分自身をもっとよく知り、自分に正直になりたいと思わせるのです。そのような正直さの中で、感情の

移ろいや時折生じる思考の頑固さの根底にある真実の中で、グルマールが語る偉大なる真理に近づくことができると、私は信じています。

そしてこの真理の空間から私たちの祈りが生じる時、その祈りは実現する以外の選択肢を持ちません。教義が示すように、「求めよ、さらば与えられん」。私たちはただ、あるべきことを伝えているだけです。これまでエーテルの中で形作られることがないままずっと存在していた可能性を現実化しているのです。それだけでなく、私たちが世界にもたらしているものは持続力があり、私たち自身を超えて届く効果があります。そうです、どんな願いも祈りによってかなえられます。しかし、その願いがかなえられた満足感は、次の願い、また次の願い、さらに次の願いがそれにとって代わるまで、どれほど長く享受することができるでしょうか？

心からの祈りは無限の実りを結ぶ、というのが私の体験です。それは生き続けます。それはある種のお守りとなり、祈る人、そしてその祈りに直接的あるいは間接的に接するすべての人の吉兆を増幅させます。偉大な聖人であるシルディのサイ・バーバの、グルマールが何度も繰り返したこの象徴的な引用句を思い出します。「私は人々に彼らが望むものを与える。いつか彼らが私の与えるべきものを欲するようになることを願って」¹

ということで、皆さんにお尋ねしたいと思います。あなたは祈ることや祈りをささげることが有益だと感じている人ですか？ もしそうなら教えてください、人生において祈りの力をどのように体験してきましたか？



¹ Cited in *My Lord Loves a Pure Heart: The Yoga of Divine Virtues* by Swami Chidvilasananda (S. Fallsburg, NY: SYDA Foundation, 1994), p. 70.